

特定関係と精神的健康との関連*

— 特定関係サポート・ストレス尺度を用いて —

橋 本 剛¹⁾

問題と目的

精神的・身体的健康に影響を及ぼす社会的要因として、近年、多くのソーシャルサポート研究が有用な知見を提供している。そして、それらの多くはソーシャルネットワーク全般の肯定的な側面が直接的もしくは間接的に精神的健康を維持し、ストレスの影響を緩衝することを明らかにしてきた (e. g. 浦, 1992)。しかし、同時に多くの心理社会的ストレス研究では、対人関係がインパクトの大きいストレスのひとつとしても挙げられている。いふなれば対人関係はサポートの源であると同時にストレスの源でもあるということだが、対人関係と精神的健康との関連に関する研究で、この二面性に関しては、多くの解決すべき課題が残されている。例えば Sandler & Barrera (1984) は葛藤的なサポートネットワークが疾病兆候と正の関連を持つことを見いだしているが、これは対人関係の性質の知覚に依拠するものであり、偶発的な側面を持つライフイベントではない。そして、彼らが意味するところの葛藤的な側面とは、Lazarus & Folkman (1984) がストレスの認知的評価・対処理論において、ストレス反応の起因として想定したライフイベントとしてのストレスラーとは別の、ネットワークに対する認知もしくは信念であると考えられる。これらの理論的な整合性が曖昧である知見を統合するためには、ソーシャルサポート研究において知覚されたサポートと実行されたサポートが概念的に弁別されるように、偶発的な、ライフイベントとしての対人ストレスラーと、安定した、性質としてのストレスフルな対人関係の知覚の弁別が必要であろう (橋本, 1995b)。

ところで、ソーシャルサポート研究における新たなト

ピックとして、ネットワーク全般のサポートと特定関係におけるサポートは概念的に弁別され、その精神的健康に対する影響力が異なるのではないかという議論がある。この点に関して、Pierce, Sarason & Sarason (1991) は、重要な他者のサポートと全般的なサポートとが、中程度の相関は認められるものの、孤独感に対して個々に影響を及ぼすことを見いだしている。また、ネットワーク全般に対する認知と、特定の個々の対人関係に対する認知との関連についてはわが国の研究でも明らかにされている (浦・高野, 1995a ; 1995b)。しかし、それとは別の問題として、ネットワーク全般に対する認知と、特定関係に対する認知の因果については明確な結論は得られていない。この疑問に関して例えば Pierce et al. (1991) は個々の関係の認知が全般的な認知に影響を及ぼすという立場の分析を行っているのに対し、浦・高野 (1995a ; 1995b) は全般的な認知が個々の認知に影響を及ぼすという立場の分析を行っている。さらに、Pierce et al. (1991) で述べられているように、これらは互恵的な影響力を持つことが考えられ、そこで一方的な因果関係を仮定すること自体が妥当であるか、疑問でもある。また、対人ストレスに関しても同様のこと、つまり、重要な他者との関係におけるストレスは、対人ストレスの総体の一部以上の重みを持つことも可能性として考えられる。しかし、いずれにせよ、このような論点を議論するための知見を提供しうる追試的研究そのものがまだ決して十分には蓄積されていないのが現状である。そしてこれらの論点の議論のためには、特定の関係における、安定した性質としてのサポートとストレスの知覚を測定する尺度を作成し、かつそれらとソーシャルネットワーク全般におけるサポートおよびストレスとの関連を検討する試みが必要であろう。

そこで本論文ではまず、特定関係における、安定した性質としてのサポートと (関係の歪みという意味での) ストレスの知覚を測定する尺度として特定関係サポート・ストレス尺度 (Relationship-Specific Support and Stress Scales : RS4) を作成する。続いて、橋本

* 本論文は筆者が名古屋大学教育学研究科に提出した修士論文 (1995年度) に加筆・修正したものである。また、本研究の一部は日本社会心理学会第36回大会において発表された。

1) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程 (後期課程)

特定関係と精神的健康との関連

(1995a) の対人ストレス生起過程因果モデルの枠組みに準じて、ソーシャルサポートとの関連、さらに先行研究では扱われなかったソーシャルネットワーク（ネットワークそのものの大きさ）、ストレスフルネットワーク（ネットワーク全般におけるストレスフルな関係の大きさ）、対人ストレスイベント変数（対人関係に起因するストレス）との関連も検証する。これによって、(1) 全般的なサポート (2) 全般的な対人ストレス (3) 特定関係におけるサポート (4) 特定関係における対人ストレス、の4側面が精神的健康に及ぼす影響を、対人ストレス生起過程因果モデルにおける位置という観点から検討する。

研究 I

【目的】

特定関係サポート・ストレス尺度 (Relationship-Specific Support and Stress Scales : RS4) の作成およびその信頼性・妥当性の検討。

【方法】

<尺度作成>

特定関係においてその関係がどの程度サポートティブと認知されているか、そしてどの程度歪んでいると認知さ

れているかを評定する尺度として、Pierce et al. (1991) を参考に、サポート尺度7項目、ストレス尺度12項目を作成した。また、従来サポート研究では、その提供者を（家族・友人・恋人など）社会的な役割で分類してきたが、実際には、役割よりも、心理的距離によってその影響力は規定されるという仮説から、性質ではなく程度としての心理的距離を測定する尺度として、関係の深さ尺度をPierce et al. (1991) を参考に6項目作成した。尺度は全て4段階評定で構成された。

<調査>

調査は1995年4月下旬から5月上旬、東海地区3大学の大学2～4年生258名（男子104名、女子131名、不明23名）に質問紙法により実施した。1年生を対象外としたのは、入学して間もなく、対人ネットワークが安定していないことを考慮したものである。質問紙は今回作成されたサポート尺度、対人ストレス尺度、関係の深さ尺度の他に、同時に尺度の妥当性を検討するための尺度として、サポートへの期待を測定する久田・千田・箕口 (1989) のSESS、関係の深さとパラレルなものとして考えられる親密性を測定する久保 (1993) によるRCI、対人ストレスを引き起こしやすいパーソナリティの尺度として小林・水田・織田・難波・洲上・大淵 (1991) の

Table 1 サポート項目・ストレス項目の因子分析結果 (主因子法, バリマックス回転)

番号	内 容	因 子		h ²
		I	II	
《ストレス項目》				
21	あなたはこの人にどのくらいいらだちを感じますか。	.816	-.237	.723
4	この人はいつもあなたをどのくらいいらさせますか。	.780	-.205	.651
20	あなたは現在のこの人に、どのくらい不満を持っていますか。	.773	-.311	.695
24	この人はどのくらい、あなたを怒らせることがありますか。	.762	-.101	.591
25	この人はどのくらいあなたの生活に干渉してきますか。	.498	.199	.288
9	この人は今のあなたにどのくらい不満を持っていると思いますか。	.469	-.223	.270
15	あなたはこの人からどのくらいプレッシャーを感じますか。	.413	.050	.291
《サポート項目》				
3	あなたに何か個人的な問題が生じたとき、この人はどのくらい頼りになりますか。	-.048	.723	.532
1	あなたはこの人に、さまざまな問題に関しての助言をどのくらい求めることができますか。	-.054	.725	.529
19	あなたが誰か別の人にとても怒っているとき、この人はそのことについてのあなたの話をどのくらい聞いてくれますか。	-.086	.724	.531
23	あなたがストレスを感じているとき、この人が付き合ってくれることはどのくらい気晴らしになりますか。	-.147	.700	.512
8	もしあなたの大切な身内が亡くなったとき、この人はどのくらいあなたを元気づけてくれると思いますか。	.009	.642	.412
16	あなたが遊びに行きたいと思ったときに、この人はどのくらい喜んでつきあってくれると思いますか。	-.055	.586	.347
5	この人はあなたにとって必要なことは耳の痛い話でもどのくらい率直に率直に話してくれますか。	.188	.506	.291
《残余項目》				
6	あなたはこの人にどのくらい迷惑をかけていると思いますか。	.339	.226	.166
2	この人とのいざこざを避けるために、あなたはいつもどのくらい努力をしていますか。	.332	.087	.118
22	あなたはこの人に対してどのくらい自分の考えを押し通そうとしますか。	.298	.157	.113
7	この人との間に何かトラブルが生じたとき、あなたはどのくらい“妥協”していると思いますか。	.264	-.001	.070
10	この人との関係であなたが与えるものは得るものよりもどのくらい多いですか。	.031	.148	.023
寄与率 (%)		18.7	18.3	37.0

短気尺度および対人不安尺度、サポート・ストレスともに精神的健康に影響を及ぼすという前提を検証するためのGHQ 28項目版(中川・大坊, 1985), 同じく工藤・西川(1983)によるUCLA 孤独感尺度で構成された。なお、サポート尺度、ストレス尺度、関係の深さ尺度、SESS, RCIはそれぞれ「現在の生活で最も接触頻度の高い」同性知人、家族、そして恋人がいる人については恋人の3つの関係対象で実施した。

【結果】

＜尺度の信頼性の検討＞

サポート尺度とストレス尺度として設定した全19項目

について、2因子性と仮定して因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行った(Table 1)。

そして項目の内容から第I因子をストレス因子、第II因子をサポート因子と命名し、それぞれ因子負荷が.40以上の項目をストレス尺度(RS-St, 7項目, Table 2), サポート尺度(RS-Sp, 7項目, Table 3)とした。なお、両因子ともに因子負荷が.40に満たなかった項目は以降の分析では除外した。また、関係の深さ尺度6項目に関して項目尺度相関を求めたところ、2項目が.40に満たなかったため、それらを除外した4項目を関係の深さ尺度(RS-D, Table 4)として採用した。尺度ごとの α 係数は.68~.85の範囲内であり、内的整合性はある

Table 2 ストレス尺度の項目尺度相関と α 係数

番号	内 容	項目尺度相関			
		友人	家族	恋人	全体
4	この人はいつもあなたをどのくらいいらさせますか。	.696	.746	.519	.715
9	この人は今のあなたにどのくらい不満を持っていると思いますか。	.303	.541	.349	.424
15	あなたはこの人からどのくらいプレッシャーを感じますか。	.369	.412	.206	.349
20	あなたは現在のこの人に、どのくらい不満を持っていますか。	.737	.749	.568	.729
21	あなたはこの人にどのくらいいらだちを感じますか。	.766	.765	.538	.752
24	この人はどのくらい、あなたを怒らせることがありますか。	.691	.695	.565	.701
25	この人はどのくらいあなたの生活に干渉してきますか。	.340	.378	.156	.388
α 係数		.812	.844	.680	.824

Table 3 サポート尺度の項目尺度相関と α 係数

番号	内 容	項目尺度相関			
		友人	家族	恋人	全体
1	あなたはこの人に、さまざまな問題に関しての助言をどのくらい求めることができますか。	.602	.687	.567	.651
3	あなたに何か個人的な問題が生じたとき、この人はどのくらい頼りになりますか。	.683	.652	.542	.654
5	この人はあなたにとって必要なことは耳の痛い話でもどのくらい率直に話してくれますか。	.422	.543	.326	.430
8	もしあなたの大切な身内が亡くなったとき、この人はどのくらいあなたを元気づけてくれると思いますか。	.606	.609	.452	.589
16	あなたが遊びに行きたいと思ったときに、この人はどのくらい喜んでつきあってくれると思いますか。	.499	.517	.388	.533
19	あなたが誰か別の人にとっても怒っているとき、この人はそのことについてのあなたの話をどのくらい聞いてくれますか。	.626	.703	.520	.661
23	あなたがストレスを感じているとき、この人が付き合ってくれることはどのくらい気晴らしになりますか。	.662	.640	.398	.645
α 係数		.835	.856	.740	.841

Table 4 関係の深さ尺度の項目尺度相関と α 係数

番号	内 容	項目尺度相関			
		友人	家族	恋人	全体
11	この人はあなたの生活のなかでどのくらい大事な役割を担っていますか。	.667	.681	.656	.681
12	あなたの生活においてこの人との関係はどのくらい意味がありますか。	.688	.726	.709	.723
13	今から10年間でこの人との関係はどのくらい親しくなると思いますか。	.548	.519	.374	.516
18	あなたはこの人に、どのくらい気がねなく頼っていますか。	.450	.533	.376	.482
α 係数		.778	.795	.719	.786

特定関係と精神的健康との関連

Table 5 尺度の平均と標準偏差

尺 度	人 数	平 均	標 準 偏 差	
サポート尺度	全 体	621	20.35	4.38
	同性知人	257	20.26	4.18
	家族	258	19.40	4.61
ストレス尺度	恋人	106	22.87	3.14
	全 体	620	13.71	4.02
	同性知人	258	12.18	3.65
関係の深さ尺度	家族	255	14.92	4.21
	恋人	107	14.53	3.13
	全 体	623	12.03	2.70
SESS	同性知人	258	11.34	2.63
	家族	258	12.29	2.76
	恋人	107	13.07	2.24
RCI				
行動の多様性	同性知人	254	27.75	8.53
	家族	257	27.31	9.52
	恋人	106	35.61	6.28
話題の多様性	同性知人	257	6.91	3.26
	家族	257	7.02	3.70
	恋人	107	10.01	3.37
生活への影響	同性知人	257	8.87	3.65
	家族	257	7.64	4.27
	恋人	107	10.21	3.83
考え方への影響	同性知人	257	4.98	1.47
	家族	256	5.46	1.56
	恋人	104	6.08	1.30
心的疲労感	同性知人	257	4.70	1.54
	家族	256	5.02	1.65
	恋人	104	5.49	1.50
親 密 感	同性知人	257	2.47	1.43
	家族	254	2.88	1.65
	恋人	104	2.56	1.49
短 気 尺 度	同性知人	257	4.44	1.57
対人不安尺度	家族	254	5.07	1.82
	恋人	104	5.57	1.49
短 気 尺 度		247	24.80	5.09
対人不安尺度		253	12.72	3.89
GHQ	全 体	256	54.36	12.83
	身体的症状	257	14.45	4.64
	不安と不眠	257	14.90	4.38
	社会的活動障害	257	14.50	3.34
	うつ状態	256	10.52	3.73
UCLA 孤独感尺度		229	40.54	9.09

と考えられた。なお、主要変数の平均と標準偏差は Table 5, RS4 尺度間の相関は Table 6, RS4 の下位尺度ごとの性差は Table 7 に示す。

<尺度の妥当性の検討>

I. サポート尺度：まず、サポート尺度と SESS の相

関を関係対象ごとに求めたところ、いずれも高い相関 (Table 8) が見いだされ、サポート尺度は SESS と内容的に平行であることが確認された。また、サポート尺度と GHQ, UCLA 孤独感尺度との相関を求めた (Table 8) とところ、GHQ については、全体的に同性

Table 6 サポート・ストレス・関係の深さの相関 (研究 I)

		サポート			ストレス			関係の深さ		
		同性知人	家族	恋人	同性知人	家族	恋人	同性知人	家族	恋人
サポート	同性知人	—	.241***	.220*	-.160**	.039	.131	.739***	.188**	.035
	家族		—	.270**	-.086	-.240***	.060	.203***	.748***	.106
	恋人			—	-.076	-.107	-.064	.080	.256**	.655***
ストレス	同性知人				—	.110†	.107	-.261***	-.007	-.115
	家族					—	.132	.115†	-.245***	-.063
	恋人						—	.032	-.042	-.098
関係の深さ	同性知人							—	.144*	-.047
	家族								—	.119
	恋人									—

***: $p < .001$ ** : $p < .01$ * : $p < .05$ † : $p < .10$

Table 7 RS4 の性差による t 検定

		男 性			女 性			t 値
		人数	平均	SD	人数	平均	SD	
同性知人	サポート	103	18.62	3.78	131	21.92	3.74	-6.66***
	ストレス	104	12.01	3.85	131	12.21	3.31	-0.42
	関係の深さ	104	10.71	2.63	131	12.07	2.40	-4.16***
家 族	サポート	104	18.25	4.53	131	20.53	4.39	-3.89***
	ストレス	103	14.02	4.04	129	15.65	4.30	-2.95**
	関係の深さ	104	11.51	2.80	131	12.93	2.48	-4.12***
恋 人	サポート	36	21.89	3.02	62	23.60	3.10	-2.66**
	ストレス	37	14.84	3.29	62	14.48	3.10	0.54
	関係の深さ	37	12.68	2.12	62	13.42	2.29	-1.60

***: $p < .001$ ** : $p < .01$

Table 8 RS4 サポート尺度・ストレス尺度と関連尺度の相関

		サポート尺度			ストレス尺度		
		同性知人	家族	恋人	同性知人	家族	恋人
SESS	同性知人	.82***					
	家族		.76***				
	恋人			.74***			
GHQ	全 体	-.11†	.01	.10	.26***	.09	.01
	身体的症状	-.04	-.00	.07	.14*	.06	.13
	不安と不眠	-.01	.10	.16	.27***	.12†	-.03
	社会的活動障害	-.16*	-.03	-.08	.17**	.08	-.05
	うつ状態	-.19**	-.05	.13	.25***	.05	-.03
UCLA 孤独感尺度	短期尺度	-.36***	-.27***	-.25*	.17**	.10	.04
	対人不安尺度				.19**	.20**	.12
					.22***	.13*	-.02

***: $p < .001$ ** : $p < .01$ * : $p < .05$ † : $p < .10$

Table 9 RS4関係の深さ尺度とRCIの相関

関係の深さ	行動の多様性	話題の多様性	生活への影響	考え方への影響	心的疲労感	関係の親密さ
同性知人	.385***	.356***	.536***	.521***	-.399***	.562***
家族	.422***	.437***	.543***	.535***	-.372***	.609***
恋人	.384***	.303**	.459***	.470***	-.199*	.522***

***: $p < .001$ ** : $p < .01$ * : $p < .05$

知人に関する得点との間に有意な相関がみられたが、家族、恋人に関しては相関は見られなかった。一方孤独感については、全ての特定関係で有意な相関がみられた。以上の結果は先行研究の知見 (Pierce et al., 1991) と一致し、サポート尺度の妥当性は確認されたと考えられる。

Ⅱ. ストレス尺度 : 次に、ストレス尺度と GHQ, UCLA 孤独感尺度との相関を求めた (Table 8)。その結果、これもサポート尺度と同様、同性知人との相関は有意であるが、家族や恋人に関しては殆ど無相関であった。また、短気尺度と対人不安尺度、それとストレス尺度との相関を求めた (Table 8) と同様、恋人以外で有意な相関がみられた。以上の結果仮定された関連性がほぼ示され、ストレス尺度の妥当性も大まかには確認されたと考えられる。

Ⅲ. 関係の深さ尺度 : 最後に関係の深さ得点と RCI との相関を関係対象毎に求めた (Table 9)。その結果、全ての尺度間で高い相関がみられ、関係の深さ尺度は親密性における影響力や多様性と密接な関係にあることが明らかにされた。

さらに、RCI の関係の長さ、接触頻度、電話頻度をそれぞれなるべく均等になるように L 群・M 群・H 群に区分し、それらを独立変数、関係の深さ尺度を従属変数とした分散分析を行った。その結果、まず関係の長さによる分散分析では、同性知人 ($F(2,255) = 2.84, p < .10$) において傾向差が見られたが、下位検定 (Scheffe 法、以下下位検定は全て同様) では有意差がみられなかった。また、恋人 ($F(2,104) = 5.06, p < .01$) で下位検定の結果、H 群 > L 群, M 群 > L 群という有意差が見いだされた。次に接触頻度と一回あたり過ごす時間を独立変数とした分散分析では、同性知人の一回あたりの時間 ($F(2,249) = 4.50, p < .05$) で下位検定の結果、H 群 > L 群, M 群 > L 群という有意差が見いだされた。また、家族の接触頻度 ($F(2,249) = 5.85, p < .01$) では、下位検定の結果、H 群 > L 群, H 群 > M 群という有意差が見いだされた。さらに恋人の接触頻度 ($F(2,98) = 4.96, p < .01$) で H 群 > L 群、一回あたり

の時間 ($F(2,98) = 6.45, p < .01$) で H 群 > L 群, M 群 > L 群という有意差が下位検定の結果明らかにされた。最後に電話の頻度と通話時間を独立変数とした分散分析では、同性知人の通話頻度 ($F(2,249) = 2.82, p < .10$) で、下位検定の結果、H 群 > L 群, M 群 > L 群という有意差が見いだされた。また、恋人の通話頻度 ($F(2,98) = 7.64, p < .001$) で H 群 > L 群, M 群 > L 群という有意差が下位検定の結果明らかにされた。以上の結果は全般的に親密な関係の期間も関係の深さと密接な関係にあることを示しており、関係の深さ尺度が親密性とパラレルであることが確認された。

【考 察】

本研究において考察すべき点としては、まず信頼性の検討で、いずれの尺度も恋人を対象にした際、 α 係数が低くなる傾向がみられたことが挙げられる。このことは、恋人関係が他の関係と何らかの点で異質であることを示唆しているのかも知れないが、現時点では今後の課題として言及するにとどめておく。

次に妥当性の検討では、サポート・ストレス両尺度ともに、精神的健康関連尺度で、同性知人との相関のみが高く、家族・恋人とはあまり関連がみられなかった。これは、家族や恋人という、非常に深い関係よりも、関係の深さが中程度である同性知人との関わりの方が気を使わねばならないという可能性が反映されたのかも知れない。また、Pierce et al. (1991) の研究においても友人との関係が孤独感に対してもっとも影響力の大きい予測因であることが示されており、再現性が示されたという意味でも、今回のサポート・ストレス・関係の深さ尺度は、今後特定関係における関係の性質を測定するのに有効であると考えられる。また、ソーシャルサポートやストレスの脅威度は女性の方が高く評価するという傾向が先行研究 (Seiffge-Krenke & Shulman, 1993 など) において明らかにされているが、この知見と同様の結果が Table 7 にみられる性差において得られ、今回作成された尺度は性差という観点からもその妥当性が支持されたと考えられる。

研究Ⅱ

【目的】

特定個人が持つソーシャルネットワーク全般におけるサポートが、個人の精神・身体的健康に及ぼす影響に関しては数多くの先行研究が既に行われている。しかしその一方で、ネットワークのネガティブな側面が精神的健康に及ぼす影響については今日までの議論は決して十分ではない。この論点に関して橋本（1995a）は、対人関係によるストレス反応（ディストレス）の直接の規定因はネットワークに対するストレスフルネスの認知ではなく実際に生じた対人関係上の出来事（対人ストレスイベント）であり、ただしネットワークに対するストレスフルネスの認知は対人ストレスイベントの規定因になるという対人ストレス生起過程因果モデルを提唱している。そこで本研究ではこのモデルの観点を導入し、先行研究で扱われなかったソーシャルネットワーク、ストレスフルネットワーク、対人ストレスイベント変数との関連も検証することによって、(1) 全般的なサポート (2) 全般的な対人ストレス (3) 特定関係におけるサポート (4) 特定関係における対人ストレス、の4側面が精神的健康に及ぼす影響を検討する。

【方法】

＜調査の実施＞

被調査者は大学1～4年生および短大1年生計399名、うち回答に不備や欠損がなかった者321名（男子114名、女子207名）を分析対象とした。被調査者の99%以上が年齢18～23歳の範囲内であった。調査は心理学の講義時間中に、質問紙により行った。

＜質問紙の内容＞

質問紙は以下の質問で構成された。

① 対人ネットワークマトリックス短縮改訂版

ネットワークそのものの大きさとして設定された変数である。「現在のあなたの日常的な人間関係を構成している人数の内訳をお尋ねします。以下の表の9つそれぞれのマスに、選択肢（A～G）の中から該当する者をひとつ選んで記入して下さい。」という教示の元で、3つのカテゴリ×3つの親密度＝9つのセルについてそれぞれ該当する人数の選択肢の記入を求めた。カテゴリの内訳は「家族・親類（以下家族）」「友人・同級生・先輩・後輩（同友人）」「その他の知人（同その他）」、親密度の内訳は「非常に親密」「わりと親密」「面識はあるが親密ではない」である。また、選択肢はA（0人）、B（1人）、C（2～3人）、D（4～6人）、E（7～10人）、F（11～20人）、G（20人以上）である。人数を直接記

入するのではなく選択肢を設定したことについては、人数記入だと欠損値および外れ値の出現頻度が高いことを考慮したものである。分析では、A～Gをそれぞれ1～7点に得点化した。

② 対人ストレスイベント尺度短縮版

対人関係に起因するストレスラーとしての変数である。橋本（1995a）で用いた対人ストレスイベント尺度のうち15項目を抽出し、個々の項目について、その出来事を経験した人については、そのことでどの程度ストレスを感じたかを4段階（全く感じなかった～非常に感じた）で評定してもらい、それをその項目の得点（1～4点）とした。経験しなかった人についてはその項目の評定を求めず、項目得点は0点とした。

③ ストレスフルネットワーク尺度改訂版

ネットワーク全般におけるストレスフルな関係の大きさを測定する変数である。橋本（1995a）でストレスフルネットワーク尺度として採用された13項目について、それぞれその特性を持った人が、被調査者の現在の人間関係で何人いるか回答を求めた。（分析段階では、外れ値によるデータの歪曲を防ぐため、9人以上の場合は9人として処理した。）

④ 特定関係サポート・ストレス尺度（Relationship-specific support and stress scales：RS4）— 家族用 —

研究Ⅰで作成され、その信頼性・妥当性が検証された特定関係サポート・ストレス尺度を用いて、非常に親密な家族・親類のうち任意の一人を対象として評定を求めた。先述したようにこの尺度は、個人と関わりのある特定の他者に対しての認知を測定するものである。下位尺度としてサポート得点（対象が被調査者に対してどの程度支持的・援助的か；RS-Sp得点）、ストレス得点（対象の存在および対象との相互作用が被調査者にとってどの程度ストレスフルか；RS-St得点）、関係の深さ得点（対象との関係について被調査者がどの程度コミットメントしているか；RS-D得点）の3つがある。

⑤ 特定関係サポート・ストレス尺度（Relationship-specific support and stress scales：RS4）— 友人用 —

前述した特定関係サポート・ストレス尺度を用いて、非常に親密な友人・同級生・先輩・後輩のうち任意の一人を対象として評定を求めた。内容は家族用と同一である。

⑥ ストレス反応尺度

中川・大坊（1985）によるGHQ（General Health Questionnaire）28項目版を用いた。

⑦ 全般的ソーシャルサポート尺度

特定関係と精神的健康との関連

ソーシャルネットワーク全般に対するソーシャルサポート認知の尺度として、松崎・田中・古城(1990)によるSSQ9を用いた。それぞれの項目について該当する人が被調査者のソーシャルネットワークで何人いるか(SSQ9N)とそれぞれの項目についての満足度(SSQ9S, 4段階評定)の評定を求めた。

【結果】

<尺度間相関>

まず対人ネットワークマトリックスについては、9つのマトリックス全ての合計を対人(ソーシャル)ネットワーク得点とした(M=35.32, SD=6.68)。対人ストレスイベント尺度については、全15項目の合計を対人ストレスイベント得点とした(M=27.10, SD=10.96, α=.84)。ストレスフルネットワーク尺度については、全項目の人数を全て合計した者をストレスフルネットワーク得点とした(M=13.31, SD=10.92, α=.83)。特定関係サポート・ストレス尺度(RS4)の家族用と友人用についての平均・標準偏差・α係数および相関を示したものがTable 10である。その結果、ほとんどサポートと関係の深さとの間に高い相関がみられる

こと、それらふたつとストレスは独立した次元であることが確認された。したがって、統計的概念弁別性の観点から、以下の分析では関係の深さ尺度は使用しなかった。ストレス反応尺度については、Likert法により得点化し全28項目の合計をストレス反応得点とした(M=55.10, SD=12.22, α=.90)。全般的ソーシャルサポート尺度(SSQ9)については、人数(SSQ9N)および満足度(SSQ9S)ともに因子分析の結果1因子性と判断し、それぞれの合計をSSQ9N得点(M=32.62, SD=16.97, α=.91), SSQ9S得点(M=27.87, SD=5.07, α=.93)とした。以上の変数間の相関をTable 11に示す。

その結果、先行研究と同様、家族・友人ともに、全体的なサポート認知(SSQ9)と個々のサポート認知(RS-Sp)に高い相関が見いだされた。しかし全体的なサポート認知と個々のストレス認知(RS-St)の相関については、家族では無相関であり、友人では逆相関が認められるという違いが生じた。

また、ソーシャルネットワークのサブカテゴリーとRS4との関連では、家族のRS4得点は親密な家族数と強い関連が見いだされたが、友人のRS4得点は親密

Table 10 特定関係サポート・ストレス尺度の平均・標準偏差・α係数・相関(研究II)

	平均	SD	α	家 族			友 人		
				サポート	ストレス	深 さ	サポート	ストレス	深 さ
家族サポート	20.80	4.01	(.77)	—	—	—	—	—	—
ス ト レ ス	14.79	3.84	(.77)	-.07	—	—	—	—	—
関係の深さ	13.35	2.35	(.70)	.66***	.01	—	—	—	—
友人サポート	21.55	3.62	(.78)	.32***	-.01	.26***	—	—	—
ス ト レ ス	12.40	3.58	(.78)	.05	.12*	.00	.02	—	—
関係の深さ	12.59	2.28	(.72)	.26***	-.01	.30***	.64***	.07	—

***: p<.001 * : p<.05

Table 11 RS4と主要変数間の相関(研究II)

RS4	家 族			友 人		
	サポート	ストレス	関係の深さ	サポート	ストレス	関係の深さ
ソーシャルネットワーク	.22***	-.02	.20***	.12*	-.00	.13*
(親密な家族数)	.13*	-.16**	.12*	—	—	—
(親密な友人数)	—	—	—	.08	-.00	-.01
ストレスフルネットワーク	.04	.08	-.02	.03	.11*	-.03
対人ストレスイベント	.01	.14*	-.12*	.02	.20***	-.03
SSQ9N	.23***	-.03	.23***	.29***	-.09†	.18**
SSQ9S	.23***	.03	.27***	.37***	-.12*	.28***
GHQ(ストレス反応)	-.08	.16**	-.12*	.13*	.32***	.07

***: p<.001 ** : p<.01 * : p<.05 † : p<.10

な友人数とあまり関連しないことが見いだされた。さらに、対人ストレスイベントについては友人の RS4 ストレス得点との間に高い相関 ($p < .001$) がみられ、その一方で家族の RS4 ストレス得点との間には対人ストレスイベントで有意水準 5% の相関がみられたのみであった。また、ストレスフルネットワークと RS4 ストレス得点についても、友人では相関が認められたが、家族では認められなかった。最後に GHQ 得点との関連については、家族・友人ともに RS4 ストレス得点と有意な相関が認められ、さらに友人の RS4 サポート得点も GHQ 得点と正の相関を示した。

＜ソーシャルサポートと対人ストレスの2側面におけるソーシャルネットワーク全般に対する認知と特定の他者に対する認知の関連の検討＞

次に、特定関係の認知とネットワーク全般に対する認知の因果関係を、サポートとストレスの両側面について検討した。まずサポートについては家族と友人の RS4 サポート得点を特定関係のサポート変数として、SSQN と SSQS をネットワーク全般のサポート変数として採用し、観測変数間の逐次的因果モデルによる構造方程式分析を行ったところ、ネットワーク全般に対する認知が特定関係の認知に影響を及ぼすモデル ($GFI = .978$, $AGFI = .781$, $AIC = 6.81$) より、特定関係の認知がネットワーク全般に対する認知に影響を及ぼすモデル ($GFI = .999$, $AGFI = .997$, $AIC = -1.89$, Fig. 1) の方がモデルの適合性が高く、そのパスも全て有意 ($p < .05$) であった。一方、ストレスについても同様に家族と友人の RS4 ストレス得点を特定関係のストレス変数として、ネットワークストレスと対人ストレスイベントをネットワーク全般のストレス変数として採用し、同

様の分析を行ったところ、こちらはネットワーク全般に対する認知が特定関係の認知に影響を及ぼすモデル ($GFI = .998$, $AGFI = .977$, $AIC = -1.05$, Fig. 2) の方が、特定関係の認知がネットワーク全般に対する認知に影響を及ぼすモデル ($GFI = .929$, $AGFI = .294$, $AIC = 31.80$) よりもモデルの適合性が高かった。ただし、適合性が高い方のモデル (Fig. 2) においてもその関連についてはネットワークストレスと友人ストレスの間に有意傾向 ($p < .10$) がみられたのみで、その他の

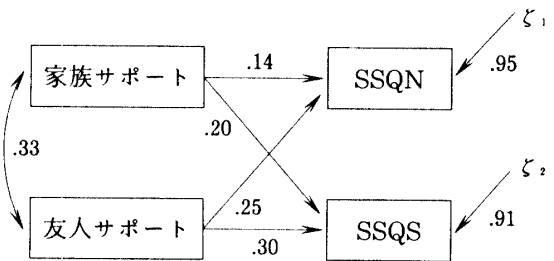


Fig. 1 サポートについての特定関係とネットワーク全般の逐次的因果モデル

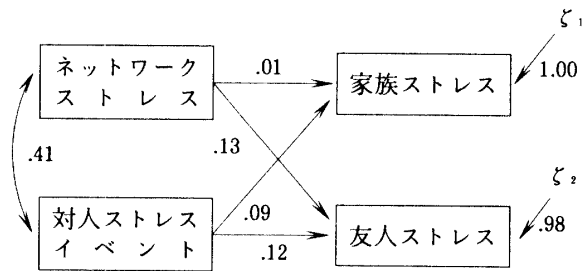


Fig. 2 ストレスについての特定関係とネットワーク全般の逐次的因果モデル

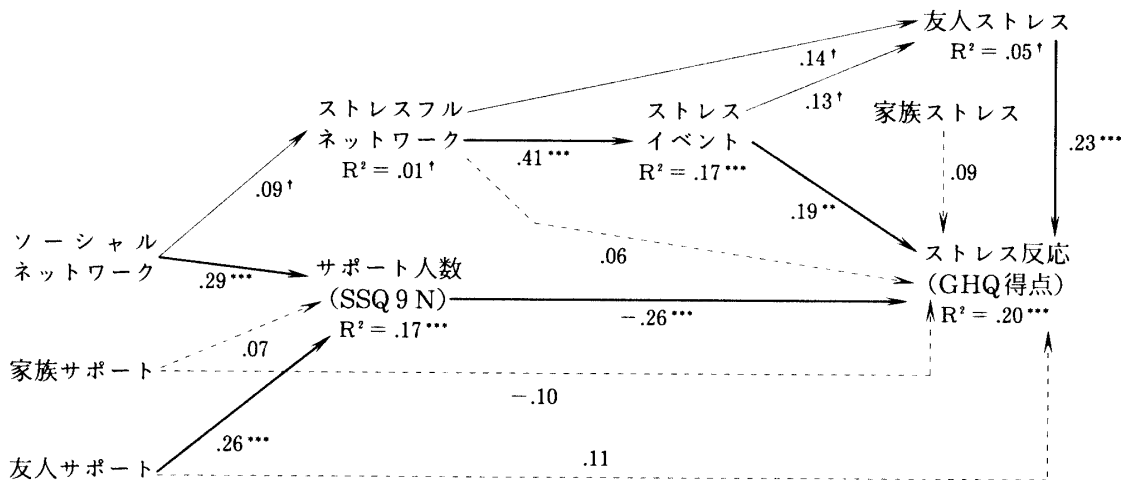


Fig. 3 特定関係変数を導入した対人ストレス生起過程因果モデル
(***: $p < .001$ **: $p < .01$ †: $p < .10$, 破線は有意でなかったパス)

パスは有意ではなかった。よってストレス変数に関しては特定関係とネットワーク全般の間に因果を仮定することに疑問を残す結果となった。

＜ソーシャルサポートと対人ストレスの2側面におけるソーシャルネットワーク全般に対しての認知と特定の他者に対する認知が精神的健康に及ぼす影響の検討＞

さらに、特定関係変数（RS4 尺度得点）を導入した対人ストレス生起過程因果モデルの検証を行った（Fig. 3）。なお、今回提示したモデルは、変数間の相関および構造方程式分析の結果を考慮し、サポートについては個々の対人関係が全般的な対人関係に影響を及ぼし、ストレスについては全般的な認知が友人関係の認知に影響を及ぼすと仮定した元でのモデルである。

その結果、家族との関係がストレス反応にほとんど影響を及ぼさない一方で、友人関係におけるサポートの認知が全般的なサポート（サポート人数）に、そして同じくストレスの認知がストレス反応に強い影響を及ぼすことが明らかにされた。また、ストレス反応を規定している変数を検討すると、ストレスフルネットワークは有意でなく、対人ストレスイベントの影響も寄与してはいるが、それ以上にサポート人数、そして友人ストレスの影響が大きい。以上の結果を要約すると、全般的に対人ストレス生起過程因果モデル自体はさほど大きく変動せず、ネットワーク全般のサポートとストレスが共に精神的健康に及ぼす影響が確認されると同時に、特定関係のサポートは間接的に、そして特定友人関係のストレスは直接的に精神的健康に影響を及ぼす可能性も示唆された。

【考 察】

全般と個々の認知の因果関係については、サポートについては特定関係の認知がネットワーク全般の認知に影響を及ぼし、ストレスについては逆にネットワーク全般の認知が特定関係の認知に影響を及ぼすという結果が得られた。しかしこれはあくまで本研究における統計的な分析によるものであり、この結果の普遍性の確認に至るためには、実際にそのどちらかに対する介入によって、もう一方の側面まで変動するかという、縦断的な実験計画に基づく研究が必要であろう。また、Fig. 3 に示されるように、本研究ではサポート・ストレスの両側面について、特定の家族関係認知よりも、特定の友人関係認知の方が対人ストレス生起過程因果モデルに大きく寄与することが見いだされた。これは、青年期には家族関係よりも友人関係の方が重要であるという青年心理学の従来の知見と一致している。そしてこのことは、メンタルヘルスの促進に向けて何らかの介入を試みる際には、家族関係よりは友人関係への介入が有効であるという傍証

となりうると考えられる。

さらに、特定関係に対する認知を導入した上での、対人ストレス生起過程因果モデルに関して、今回のモデルでは対人ストレスイベントのみならず、ストレスフルな友人関係の認知も精神的健康に悪影響を及ぼすことが見いだされた。この結果をストレスの認知的評価・対処理論（Lazarus & Folkman, 1984）の枠組みで考えると、何らかの対人ストレスイベントが生起したとき、重要だと認知されている友人関係のあり方が、対処の可能性に大きく影響していると推測される。したがって、Fig. 3 の過程を要約すると、対人ストレスが生起するまでのプロセスはネットワーク全般のネガティブな認知に関する変数に規定されるが、そのような事態に対する対処のプロセスにおいては、特定の友人関係の認知に関する変数が強い媒介因となると考えられる。健康心理学は「治療」のみならず「予防」にもウェイトを置いている点で臨床心理学と異なるが、その意味からも、ネットワーク全般のあり方がストレスである対人ストレス事態の生起を規定し、個々の関係は対処を考える際に重要であるという本研究の知見から得られた仮説は今後さらなる研究によって議論されるべきであろう。

全体的考察

本研究では特定関係におけるサポート、ストレス、そして関係の深さについての関係性の認知を測定する尺度を作成し、研究Ⅰではその並存的妥当性、研究Ⅱでは対人ネットワーク全般に対する認知との関連について検討した。

研究Ⅰでは、特定の他者（同性知人、家族、恋人）との関係がどれほどサポートティブであり、どれほどストレスフルなものであり、どの程度深い関係と認知されているのかを測定する尺度「特定関係サポート・ストレス尺度：RS4」の信頼性と妥当性が確認された。ただし、いくつかの考察すべき問題点もある。まずひとつは、恋人を測定した際の、尺度の信頼性および妥当性が決して十分ではなかった点である。これは恋人という関係性の持つ何らかの特殊な要因が介在していると考えられるが、それが具体的には何なのかは現時点ではほとんど不明であり、先行研究のレビューから再度始める必要があると思われる。また、サポートと関係の深さとの違いの明確化も今後に残された課題である。今回作成された尺度では家族、友人などの社会的なラベルによる影響力の違いよりも関係の深さによる影響力の違いが大きいのではないかとこの仮説の元に関係の深さ尺度を作成したが、この尺度の分布がかなり高得点に片寄る傾向があったので、この仮説についての検証は行わなかった。これ

は被調査者に評定対象を特定してもらう際の教示に問題があったと考えられるが、今後はこの点を考慮した上でこの仮説を検討する必要がある。さらに、本研究では概念的に弁別されるものとして、これらを別の尺度として設定したが、本研究と類似した研究を行っている浦・高野(1995a; 1995b)では、これらを弁別せず、関係の深さはサポートに含まれるという立場が提唱されている。実際にサポートと関係の深さは本研究でも統計的には明確に弁別できなかったが、今後は、関係の深さがサポートやストレスの影響力を増幅もしくは低減するという仮説を実証することによって、本研究における弁別が有意義であることを実証する必要があると考えられる。

特定の関係におけるサポートとストレスの認知が全般的なサポートやストレス、さらにストレス反応にどのような影響を及ぼすかについては、研究Ⅱで検討された。ここでは特定関係の認知を導入した対人ストレス生起過程因果モデルを用い、特定関係の認知は対人ストレスイベントの生起までの過程には影響を及ぼさない一方で、対人ストレスイベントが起こってからの対処方略の段階で重要な媒介因となることが示唆された。また、サポート、ストレスの両面において、家族関係よりも友人関係の認知の方が影響力が大きいことも見いだされた。青年後期である大学生・短大生における友人関係の影響の大きさは先行研究(Seiffge-krenke & Shulman, 1993など)で指摘されており、今回の結果もそれらの知見を支持するものである。ただし、本論文は対人ストレスが生起するまでの過程を中心に扱ったので、それ以降の認知的評価および対処に関する分析及び考察は決して十分ではない。今後はそれらに焦点を絞った研究へのさらなる発展が望まれるであろう。

最後に、本研究に関してその他にも考えられる考察をいくつか挙げてまとめに代える。

まず、研究Ⅱでの対人ストレス生起過程因果モデルに基づく分析の結果、今回明らかにされた知見にしたがえば、精神的健康に直接的な影響を及ぼす対人関係のネガティブな側面は、対人ストレスイベント、そして特定の友人との関係における認知されたストレス度である。前者はストレス反応の直接因であるストレスサーとして想定されるので、その影響力の強さは仮説通り(橋本, 1995a)である。そして後者に関しては、先述した青年後期における友人関係の影響の大きさを反映した結果であると考えられるが、この変数はストレスに対する認知的評価の段階、つまりソーシャルサポートの利用可能性評価の段階で強い影響力を持つと考えられる(橋本, 1995b)。例えば、友人からの道具的もしくは物質的サポートは、もし家族成員が利用可能なら、適切とは見な

されない。しかしながら、友人からはより頻繁に情緒的サポートが得られるのみならず、彼らはこの種のサポートのより確固たる源である(Sarason, Pierce, & Sarason, 1990)。つまり、友人には情緒的サポートがより求められるのだが、その関係に歪みが生じている状態では、道具的サポートは提供できても、情緒的サポートは提供できないという事態が生じ得る。なぜなら、情緒的サポートには、道具的サポートと違って、サポート受容者の主観が大きく介在するからである。また、青年期は年齢とともに仲間からのサポートが増大していく傾向があり(Seiffge-krenke & Shulman, 1993)、青年後期はそのピークと考えられる。そして、本来は重要なサポート提供者であるはずの特定の友人からのサポート利用が困難であるという事態は、精神的健康状態の悪化を促すのに十分な要因であろう。ただし、本論文では対処段階に関してはほとんど扱っていないので、ここでの主張をより確固たるものにするために、今後は認知された関係性が、実際に行われている対処とどのような関連を持つのかを検討する必要がある。

また、本論文で示された一連の対人ストレス生起過程、そして認知的評価から対処の過程は、必ずしも確定的なものではない。例えば、本来ストレス反応とは逆相関を持つはずのサポートについて、研究Ⅱにおいては、友人サポートとストレス反応が、正の相関を持つという事態が生じている。これは原因として、ふたつの可能性が考えられる。ひとつはストレスフルな状況だからこそ、友人が多くサポートを提供してくれるという仮説、そしてもうひとつは友人からのサポートの提供がかえって自尊心を低め、そのことによってストレス反応が喚起されるという仮説である(e.g. Barrera, 1986)。そしてこのうちの前者については、サポートからストレス反応へのパスではなく、ストレス反応からサポートへのパスが仮定されており、その方向性は決して非論理的ではない。これらの疑問の解明のためには、縦断デザインによる研究のさらなる蓄積が不可欠であると考えられる。

さらに本論文では全ての研究を通じてサポートよりもストレスの方が影響力が強いという結果が見いだされ、Taylor(1991)の活性化-最小化仮説が支持された。ところで、本来、ストレス反応とは逆相関を持つはずのサポートであるが、研究Ⅱにおいては、先述したように友人サポートとストレス反応が、正の相関を持つという事態が生じている。これらのことは、ただ単純にサポートとストレスという概略的な2変数を対比させることはあまり有用な視点ではないということを示唆している。つまりサポートといっても全般的なサポートと特定関係でのサポート、さらに特定関係でも家族と友人のサポー

トが、それぞれ対人ストレス生起過程因果モデルの中で独特の役割を担っている可能性があり、今後、サポート・ストレスともに、詳細に区分された個々の変数が、一連のプロセスの中でどのような影響を及ぼしあっているのかという観点からの研究の一層の発展が望まれる。

引用文献

- Barrera, M., Jr. 1986 Distinctions between social support concepts, measures, and models. *American Journal of Community Psychology*, 14, 413-445.
- 橋本 剛 1995a 対人ストレス生起過程因果モデルの検討 日本グループ・ダイナミクス学会第43回大会発表論文集 Pp. 226-227.
- 橋本 剛 1995b ストレッサーとしての対人葛藤ーストレス低減方略への展望ー 実験社会心理学研究, 35, 185-193.
- 久田 満・千田茂博・箕口雅博 1989 学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み(1) 日本社会心理学会第30回大会発表論文集, 143-144.
- 小林 裕・水田恵三・織田信男・難波正人・淵上克義・大淵憲一 1991 パーソナリティ尺度 A. H. パス 大淵憲一(監訳) 対人行動とパーソナリティ 北大路書房
- 久保真人 1993 行動特性からみた関係の親密さーRCIの妥当性と限界ー 実験社会心理学研究, 33, 1-10.
- 工藤 力・西川正之 1983 孤独感に関する研究(1)ー孤独感尺度の信頼性・妥当性の検証ー 実験社会心理学研究, 22, 99-108.
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. 1984 *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer. (ラザルス R. S., フォルクマン S. 本明 寛・春木 豊・織田正美 監訳 1991 ストレスの心理学ー認知的評価と対処の研究ー 実務教育出版)
- 松崎 学・田中宏二・古城和敬 1990 ソーシャル・サポートの供与がストレス緩和と課題遂行に及ぼす効果 実験社会心理学研究, 30, 147-153.
- 中川泰彬・大坊郁夫 1985 日本語版 GHQ 精神健康調査表手引 日本文化科学社
- Pierce, G. R., Sarason, I. G., & Sarason, B. R. 1991 General and relationship-based perceptions of social support: Are two constructs better than one? *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 1028-1039.
- Sandler, I. N., & Barrera, M. Jr. 1984 Toward a multimethod approach to assessing the effects of social support. *American Journal of Community Psychology*, 12, 37-52.
- Sarason, B. R., Pierce, G. R., & Sarason, I. G. 1990 Social support: The sense of acceptance and the role of relationships. In B. R. Sarason, I. G. Sarason & G. R. Pierce (Eds.), *Social support: An interactional view*. New York: John Wiley & Sons. Pp.97-128.
- Seiffge-krenke, I., & Shulman, S. 1993 Stress, coping and relationships in adolescence. In S. Jackson & H. Rodriguez-Tome (Eds.), *Adolescence and its social worlds*. Hove: Lawrence Erlbaum Associates, Pp.169-196.
- Taylor, S. E. 1991 Asymmetrical effects of positive and negative events: The mobilization-minimization hypothesis. *Psychological Bulletin*, 110, 67-85.
- 浦 光博 1992 支えあう人と人ーソーシャルサポートの社会心理学ー サイエンス社
- 浦 光博・高野優子 1995a 対人関係の肯定的側面と否定的側面の関連の分析 日本社会心理学会第36回大会発表論文集, Pp. 308-311.
- 浦 光博・高野優子 1995b 対人関係と健康との関連の変容過程の検討 日本グループ・ダイナミクス学会第43回大会発表論文集, Pp. 14-17.

(1996年9月13日 受稿)

ABSTRACT

Relations between relation-specific perceptions and mental health:
Development of the Relation-Specific Support and Stress Scales (RS4)

Takeshi HASHIMOTO

The purpose of this paper is (1) development of the relation-specific support and stress scales for measuring perceptions of social support and stress in specific relationships, (2) to investigate relations between general perceptions of support and stress based on social network and relation-specific perceptions of them based on specific relationships, and (3) to examine effects of perceptions of support and stress based on general network and specific relationships on mental health. Study I examined reliability and validity of these scales. Employing these scales, Study II exposed that relation-specific perceptions of support influence on general perceptions of support, while relation-specific perceptions of stress were caused by general perceptions of stress. Furthermore, result of path analyses based on the interpersonal stress arousal process model indicated that general perceptions of support and stress events and relationship-based perceptions of stress from friends each added to the prediction of distress, although perceptions from family did not. Implications of these findings are discussed.

Key words : the relation-specific support and stress scales (RS4), relation-specific perception of support, relation-specific perception of stress, general perception of support, general perception of stress